

地点、システム制御室、及びポンプ室を運転した状態で見学できた。



- パイプの径は 400mm 程度と想像する。
- 驚いたのは、Sandshifter による砂採取地点、水を送り込むパイプ、及び吸い込まれた砂と水の通るパイプ付近を子どもや大人が歩き回っていたことである。
- 付近にはバリケードがなく、深みがあるなど危険を促す注意看板を立ててあったが、日本ではこのような装置に近づくことを強制的に排除するように措置されるはずで、オーストラリアでは自己責任が徹底されていると想像する。
- 写真には Sandshifter の姿が見えないが、LEX 氏曰く水面から 6m 程度下に沈下しているということだった。
- 自沈式の簡易な浚渫装置として、有意義な機能を果たしている。



- LEX 氏から頂戴した別紙資料 (Noosa Sand Transfer System Report) では、我々が現地に居る間に 19 分間運転され、34m<sup>3</sup> のスラリーを運び、21.3m<sup>3</sup> の砂を運んだと示されていた。
- 1 時間当たりの砂に換算すると 63.8m<sup>3</sup>/h となった。
- システム制御室にてモニターを確認した際、砂の濃度は平均では 20%程度、最大では 52%を目撃した。
- モニターには、Noosa River からポンプを使って給水する地点、砂採取口、濾過装置等の映像や運